

快適な間取りを考える

……居心地のよい住まいとは……

<目次>

居間と吹き抜け

階段の位置

内と外をつなぐ半屋外空間

もてなしの玄関・ポーチ

居心地のよい住まいとは・・・

居心地のよい住まい獲得には機能的な側面と精神的側面の二つの要素を満たす必要があります。機能的な側面には家族の動線を考慮した使い勝手のよい間取りを初めとして、安全性や耐久性・気密性・断熱性など性能表示や品質管理に関するものなどが上げられます。それらは具体的に図や表で表したり、はっきりとした数値や言葉で説明することができます。

一方、精神的側面には造形やデザイン・芸術性などといったようなものが考えられますが、機能的なもの比べると抽象的でわかりにくく、また説明もしづらいものばかりです。

建築家の出江寛氏は建築家資格の必要性をフィギュアスケートの採点方法に例えて、「技術点が満点でも芸術点が低ければメダルには手が届かない。現在の建築士制度は技術のみの資格であり、技術と芸術の両面を兼ね備えた建築家資格制度を早急につくるべきである」と語っていますが、住まいに例えるなら、技術が機能的な要素であり芸術は精神的要素であると置き換えることができるのではないのでしょうか。

大地震に耐える強度を持ち、高気密で高断熱な材料を使い、最新の設備機器類を導入した住まいを獲得したとしても、満たされない何かを感じる人が多いのではないのでしょうか。その「何か」が精神的な要素の持つ力であり、素晴らしさであると考えます。

住まいに利便性や性能・機能ばかりを追い求めても答は見つかるものではありません。年月と共に愛情の深まる素材選びや生活の中に自然の営みを感じられる工夫、五感をはぐくむ仕掛けづくりなど、情緒や潤いを大切にしたい住まいづくりにこそ、その答が隠されているのではないのでしょうか。

いままでの事例を通して、住まいに精神的な側面をどう取り込めばいいのか、居心地のよい住まいづくりとはどのようなものなのかを、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

2007年9月9日



富田真二／富田建築設計室

居間と吹き抜け

家族が集まる居間や食堂に吹き抜けの空間を提案することがよくあります。吹き抜けは空間をダイナミックに演出すると共に、上部の壁や天井にハイサイドライトやトップライトを設けることにより、採光や通風を容易に確保することができます。また、上階にある子供室とのコミュニケーションを取り易くするので、幼児期や発育期、また個室に籠もりがちになる反抗期にも下階から十分に気くばりすることができます。子供のいる家庭にとっては大いに力を発揮してくれる装置といえます。

その一方で玄関ホールに吹き抜けのある住まいもよく見かけますが、吹き抜けは暖房が効きにくいという理由などで居住スペースでない玄関ホールに取ることが多いようです。居間にある吹き抜けは家族のコミュニケーション装置として機能しているので、玄関ホールに取るのでは大きな違いということになります。

夏季は暖まって上昇した空気を外部に放出することで、室内は涼しく快適に過ごすことができますが、冬季の暖房が効かない(足元が寒い)という問題が出てきます。その解決方法として薪ストーブや床暖房を採用することになります。

薪ストーブは1台で40~50帖大の空間を暖める能力があり、大空間には理想の暖房器具といえます。上層に集まった暖気を下層に下ろす工夫さえ考えてやれば、快適に過ごすことができます。とはいっても、全ての家庭で薪が段取りできるわけではないので、その時は床暖房を導入することになります。床暖房は下層と最上層の室温がほとんど変わらないのと空気を攪拌させないのでクリーンで快適な室内環境を容易につくることができます。床暖房には大きく分けて温水式と電気式がありますが、深夜電力利用の蓄熱式電気床暖房を採用するとランニングコストが下がり、石油ストーブ並みの燃料費でまかなうことができます。

いずれにしても居間に吹抜けをつくる場合は、薪ストーブか床暖房は備えたいものです。

階段の位置

階段は上下階をつなぎ昇降する役割だけではなく、空間を演出する重要な要素の一つです。

居間の中に置かれた階段は空間を引き締めるオブジェとなり、空間を構成するインテリアにも影響を与えます。また、空気の流れを左右する要因にもなるので、夏季は暖まった空気を上昇させて室内のサーキュレーション効果を良好にします。

階段の形には直線階段や折れ曲がり階段、螺旋階段などさまざまなものが考えられますが、空間のイメージに合わせた構造、材質を選択しなければなりません。金属製にするのか、木製にするのか、手摺の形はどうするのか、踏面・蹴込み寸法はなど、機能とデザインの両面から考えなければなりません。良い設計の階段は知らず知らずの間に昇ってしまうといわれますが、そこには負担に感じさせない演出や仕掛けが隠されているのです。

階段の位置は玄関ホールか廊下に置かれることが多いのですが、その位置によって大きな違いが生まれてきます。もう20年以上も前の話になりますが、ある高校教諭の「階段の位置と子供の非行率の関係についての研究報告」に、玄関ホールや廊下にある階段と比べて、居間に配された階段を持つ家庭の子供の非行率が極端に低かったことが記されていました。

家族のいる居間を通らないと自分の部屋に行けない動線が子供を非行の誘いから救っているのです。利便性や機能性だけでは捕らえられないプランの難しさがここにもあるのです。

「居間と吹き抜け」の項とあわせて「階段の位置」を考えると、より分かり易くなると思います。

内と外をつなぐ半屋外空間

かつての民家には炊事場や通り庭などの土間や、和室の前には決まって縁側がありました。土間は外から内へ、縁側は内から外へのつながりを強める空間として重要な役割を果たしていました。

豊かな四季を持つ日本の住まいは自然をうまく取り込み造られてきたのです。厳しい自然から身を守りながらも、自然をこよなく愛し自然と共に生きてきました。深い軒下空間にある土間や縁側は雨の日も使うことができます。

戦後、西欧化が進み洋風住宅ブームの中で、土間は土やほこりを室内まで持ち込むとして嫌われ、縁側は室内に取り込めば部屋が広くなるとして消えていきました。内(家)と外(庭)をつなぐ大切な空間であったはずの土間や縁側がなくなったことで、庭はただ見るだけの庭に変わっていったのです。

しかし、最近のガーデニングブームは、かつての縁側をデッキテラスという名に変えて復活させています。室内の床とレベル差の少ないテラスは外に出ることが負担にならないので、生活の中に外部空間を容易に取り込むことができます。居間や食堂から続くテラスは、外部でありながら内部の延長としての機能と働きをあわせ持っています。くつろぎの場をテラスまで延長することにより、アウトドアリビングとして十分に楽しむことができます。昼間はカフェテラスとして家族の憩いの場になり、夜にはライトアップされた樹木などが静寂で落ち着いた空間を演出します。友人や知人を招いてのホームパーティーには最適のスペースになるにちがいありません。

もてなしの玄関・ポーチ

玄関やポーチは来客を迎え入れる大切な空間です。ほとんどの訪問者は玄関までしか入りませんから、歓迎の気持が伝わる演出や工夫が欲しいものです。

長いアプローチはマイナス要因のように思われがちですが、決してそうではありません。歓迎の演出や工夫ができる場所と捕らえて欲しいのです。道路から玄関までの距離がない場合は、斜めに振ったり、折れ曲がらすことで距離を取ることもさへあります。そのアプローチに住まい手の心くばりのしつらえがあれば、訪問者は暖かい気持になれるのです。しつらえを演出できる仕掛けづくりが設計者の役割とい

えるかも知れません。

玄関は1坪ほどと決められているわけではないのに、なぜか1坪大が多いようです。来客を迎え入れる空間という原点にかえて考えると、それぞれ独自の形があつていいと思います。建床面積にゆとりがあればベンチやテーブルがあつてもいいし、かつての通り庭のように直接、内庭につながれば、話の流れで庭に案内するのも容易になります。いっそのこと、玄関ホールと居間の垣根を取っ払ってしまったほうが自分らしいと思う人がいるかも知れません。恒例になっている1坪大の常識に捕らわれず、個性的な玄関であつてほしいと思います。

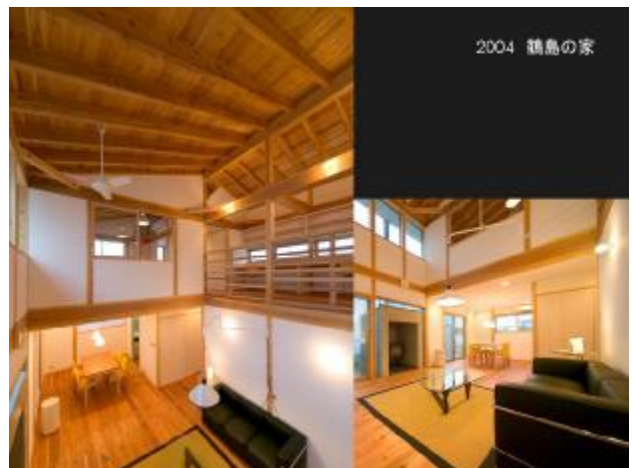
上品に迎える家、さりげなく通す家や気安く招き入れる家など、玄関ポーチは外観と同じように家人の人柄が最も反映される住まいの顔なのですから・・・・・・

完

住まいセミナー

快適な間取りを考える

・・・居心地のよい住まいとは・・・



階段の位置

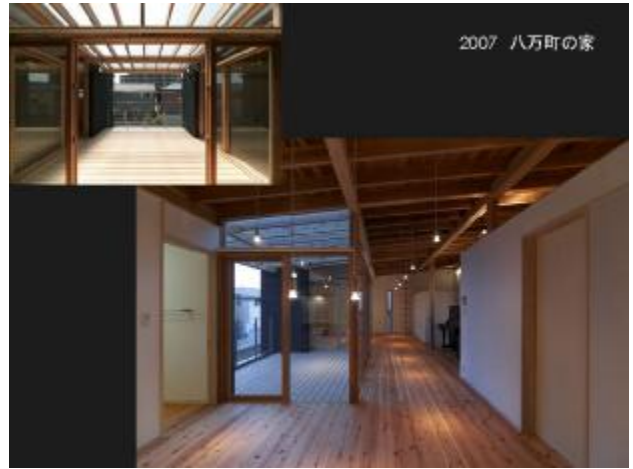


内と外をつなぐ半屋外空間





2004 シルバースカイハウス



2007 八万町の家



2005 医王寺の家



もてなしの玄関・ポーチ



2005 小さなコートハウス



1992 富吉の家



2006 丈六町の家



1993 木煉瓦の土間の家

